

第25回河川生態学術研究発表会

自然環境グループ 研究員 渡邊 祐介

1. はじめに

当研究所が事務局を務める河川生態学術研究会(以下、研究会)と応用生態工学会とで共催する「第25回 河川生態学術研究発表会」が令和5年11月2日に月島社会教育会館にて開催されました。対面の会場とオンラインを併用するハイブリッドでの開催としたことで、遠方からの参加が可能になったこともあり、約370人と多くの参加申込みを頂きました。

この研究会は、平成7年に生態学と河川工学の研究者が共同して創設したもので、河川における生態系の解明とその上に立った河川管理について研究、議論するとともに、次世代を担う研究者を育成することを目的に取り組んでいます。

2. 研究発表

プログラムの前半では、4つの研究グループ毎に研究発表が行われました。この研究グループは、生態学と河川工学の研究者が参加し連携して研究を進めているのが共通の大きな特徴です。概ね5年の研究期間でそれぞれ異なる研究テーマとフィールド河川で研究をしていますが、河川生態に関する最先端の幅広い研究内容を一度に知ることができるのが発表会の大きな魅力となっています。

事後のアンケート結果では、特に長良川、筑後川の研究グループのご発表に多くの関心が集まりました。

研究グループの発表 ※敬称略
長良川研究グループ/代表 萱場 祐一(名古屋工業大学教授) 「気候変動及び流域治水シナリオに基づく生物多様性評価とハビタット管理手法の提案」
千曲川・信濃川研究グループ/代表 箱山 洋(長野大学教授) 「On the importance of habitat continuity for riverine ecosystems and related restoration measures」
筑後川研究グループ/代表 鬼倉 徳雄(九州大学農学研究院 教授) 「気候変動下における災害復旧事業で考えるべき課題～H29年7月九州北部豪雨災害復旧事業から見えてきたこと」(林 博徳(九州大学工学研究院 准教授))
狩野川研究グループ/代表 塚越 哲(静岡大学 教授) 「流況変化に対する河川-海洋沿岸生態系の応答-狩野川水系における解明と生態系保全策」

また、午後の部では5年ぶりにポスターセッションが行われました。千曲川・信濃川研究グループ、筑後川研究グループ、狩野川研究グループの皆様か

ら計16件のポスター発表を実施頂き、山梨大学岩田智也教授(狩野川の流況変化が駿河湾沿岸の一次生産と食物網に及ぼす影響)が最優秀賞、長野大学児玉紗希江淮准教授(信濃川の魚類多様性と環境の関係:生息地連続性の理解に向けて)が優秀賞を受賞されました。

3. 話題セッション

プログラムの後半は、「流域管理とネイチャーポジティブ」をテーマにパネルディスカッションが行われました。国内・国外事例や日本の政策等について登壇者の方々から話題提供頂き、プロセススペース評価における土砂収支や流況把握の実務上の課題や、災害復旧時のネイチャーポジティブを実施する上での課題、地域住民へのネイチャーポジティブの理解に向けた議論が行われました。

事後のアンケート結果では、今回最も関心の高いプログラム項目であり、ネイチャーポジティブと流域治水を進めていく必要性への理解や、今後の具体的な施策への反映について興味を持たれた意見が多く寄せられました。

話題セッション ※敬称略

コーディネーター:

島谷 幸宏(熊本県立大学 特別教授)、中村 太士(北海道大学大学院 教授)

パネリスト:

宇野 裕美(日本学術振興会 北海道大学大学院 特別研究員/コロラド州立大学 客員研究員)

中村 圭吾(リバーフロント研究所 主席研究員)

舩田 直樹(国交省 水管理・国土保全局 河川環境課技術調整官)



図 話題セッションの様子

4. おわりに

当研究所では、引き続き研究会の運営を介してその活動を支えるとともに、研究発表会やウェブ、SNS等で河川生態の研究成果や河川管理に活用できる情報を発信し、社会実装にも積極的に取り組んでいきます。